

## 「革新」のリハビリテーション（続き）

9条は新しく変えなければならないと「保守」がいう。9条は守らなければならないと「革新」がいう。このねじれについて前回述べたつもりである。奇妙に見えるかもしれないが、それはこの憲法が制定時に持っていた、未来を創ろうという志向からすれば当然のことだ。そしてこの憲法には、現に「戦後」を創る性能があった。逆に言えば、それくらい戦争、特に敗戦のもたらしたものがひどかったということである。

結局、この「戦後」をどうとらえるかが「革新のリハビリテーション」になる。

というのも、「革新」は、この「戦後」を「守るべきもの」として肯定的にとらえることに失敗しているのではないだろうかと思うからである。

確かに「戦後」は「革新」にとって敗退につぐ敗退の歴史だったかもしれない。60年安保や70年安保、さかのぼれば逆コースやサンフランシスコ講和条約、再軍備はすべて「敗退」の記憶だ。保守政権が長く続いたこともそう感じさせることにつながるだろう。（ただ社会にとって重要なのは、権力の座にどの党がついていたかということではなく、その権力が何を達成したかということのはずだけれども）

敗退の記憶の一方、それらのできごとは「革新」にとって、「負けたけれども精一杯戦った」と懐かしく思い出されたりするものであったりもする。

結局、「戦後」をとらえる視点は次のようなものになる。つまり、負け続けているので、社会は悪くなる一方だ、革新の運動も時代につれて停滞し退潮している…と。

「保守」ふうの言い方をとれば、これは「戦後についての自虐史観」である。状況は悪くなる一方だとされるので、相対的に「精一杯戦った」古い世代は「悪くない」ことになる。そして駄目なのはそれを受け継がないより若い世代だということになる。ただそのなかでも、自分たちにもよく見える、何か過激なことをしたりわかりやすく活動したりする若い世代だけは特別で、それをさして「若い割には頑張っている」などと評価する。

けれども日本史のなかで現代ほど人権に関する配慮が進んでいる時代はない。人権意識についても、若い人ほど高いスコアが出るのではないか。人の生き方の多様性に関する理解も同じく高く出るのではないかと思う。「革新」の成果である。と共に、下手をすると、古い世代の「革新」の感覚で当然のこととと思っていたことが、若い人の目からすればかなりおかしなものに見える可能性がある。古い世代の「革新」が、既得権に乗った「保守」に見える可能性も。

もし進歩していれば、次の世代が前の世代（の成果によりこれ）を越えてゆくのは当たり前なことなのに、後退が続いているように見えるという「自虐史観」に陥ってしまっているのが、若者は「保守」化しているように見える。そして、そう見てしまう判断のほうを自己反省的にチェックすることがない。

「戦後についての自虐史観」「後退史観」、ここからの解放が「革新のリハビリテーショ

ン」の第一歩となるのではないか。「革新」は後退しているのではなく前進している。それゆえに「守るべきもの」が増えてしまったのだ。「革新」の保守化は、その輝かしい歴史の成果であると。

前回も述べたとおり、「守るべきもの」が増えれば、それはある種の「弱さ」につながることもなる。現状維持が精一杯で、それができればまずまず。挑戦を受けているのは自分たちのほうで、一気に世の中を変えるような打ち出の小槌はありえないということである。

ただ一方で、「革新」が放置してきた問題もある。「体感する歴史」との関係でいえば、天皇制に関する事柄である。「革新」が至高の理想としている完全に平等な社会と「象徴天皇制」はどう両立するのだろうか。絶対に憲法を変えてはいけないというのであれば、「革新」はここに関する説明を一生懸命考えるべきなのではないのか。

占領期に制定された憲法に、ある意味で「現実主義」がセットされていたというのなら、それを变えることもまたあり得るわけで、それでも憲法は絶対に变えてはいけないと主張するのなら、この問題を誠実に問い続けるという宿題が「革新」には残されているはずである。

## 滅亡と歴史

少しまた話題を変えよう。「滅亡」についてである。何らかのかたちで「歴史を体感すること」に関係する「滅亡」についてはもともと触れるつもりだったけれども、直接の原因は『シン・ゴジラ』（2016年、東宝）を観たからである。

この映画、ゴジラ映画のなかではトップクラスな一方、娯楽映画一般という評価軸を用意したとしたら、平均点というところではないだろうか。というのも、そもそもゴジラ映画の「面白さ」は前半から中盤にかけてゴジラが暴れ回るところにあるのであって、そういう強大な「ゴジラをどうやっつけるのか」という決着については基本的に軽く観られるようにするお約束になっている。ゴジラ退治には、通常戦力を超えた戦力の出動が求められるが核戦力は使えない。それで最後に思いもかけぬ解決策や新兵器が出るのだが、そうなら最初からやればいいのか…という話になる。いつものことだ。そうしたことから、どうお話を畳むかには物語のクライマックスが置かれない。ゴジラ映画の観客はいつも、前半の破壊のシーンで満足し、物語の後半から終盤にかけては、あまりに馬鹿馬鹿しいのはいやだなあと思いつつ、終わるのを待つのである。

それはともかく、今回の映画では、ゴジラがもたらすその「滅亡」の大きさと小ささがいつも以上に気になった。通った後はめちゃくちゃに破壊するし、それはとてもリアルに見えた。そして現実離れした都市の主要領域の破壊シーンが今回の肝だった。今回の映画では、とりわけゴジラによる「滅亡」が美しく映像化されている。

ただそれは、大衆娯楽映画などで示される核戦争による滅亡に比べれば遙かに小さい。あるいは現実に一地方をおそった巨大な地震と津波、原発事故と比べてもそうだ。あれだ

けの地震と津波を実際に経験してもなおゴジラによる破壊にハラハラできるのは、今回の映画のもう一つのポイント、首都の大災害にあたって政府・官僚組織がきちんとそのパフォーマンスを発揮できるのかという関心が日本人に共有されているからだろう。(日々の日常の中で「想定内」を確実にこなすことこそが求められている官僚組織が、さらに「想定外」の対応も完璧にこなせと市民に要求されるのは、ほんとうに気の毒にも思えるけれども)

ともあれここは、通常のゴジラ映画であれば、破壊パートと到着パート以外にある訳のわからないドラマパートに当たる部分である。こういう意志決定をめぐる場をスリリングに描く映画がこれまであまりなかったために新鮮だったということはあるだろう(『博士の異常な愛情』を観よ)。つまり、政府・官僚組織云々は、映画を(曲がりなりに)「大人向け」に仕立てるために必要だったというだけで、本質的ではない。

制作者が狙ったとおり、多くの観客は、それぞれ自分勝手なやり方で「滅亡」に魅せられていたのではないかと思う。

そして「滅亡」の感覚は、神話や歴史が孕まれる場である。人の生死において受け継がれていく自分たちの経験の(ある特定のやり方による)集積によって神話や歴史がかたどられるのだとすれば、滅亡はその危機にあたる。逆に言えば、戦争や滅亡という試練において、個々の存在に根ざした経験ではなく、集合的な「神話・歴史」の必要性が呼び出されるのだ。(そうでなければ歴史は日常の繋がりの中に埋没したまま意識されることがないかもしれない)

個々の存在のかけがえのなさや別個にあるいは並行に存在する集合性は、「神話」によって表現される。ここでは日常を吹き飛ばす「滅亡」だ。そのわりにはこの映画で示された「滅亡」の大きさ・小ささの「幅」、もう少し言えば「調節」がどうしても気になってしまう。(続く)